アメリカのcoloring bookを利用した食育ぬりえ絵本の製作と自己評価

柴　　英里

『高知大学教育学部研究報告』第72号抜刷　2012年 3 月

論　文

アメリカのcoloring bookを利用した食育ぬりえ絵本の製作と自己評価

Creation and Self-assessment of a Picture Book for *Shokuiku* Applying American Coloring Books

柴　　英里（高知大学教育学部）

Eri　SHIBA

Faculty of Education, Kochi University, Kochi, Japan

ABSTRACT

This study looks at the educational effectiveness of creating original picture books for *Shokuiku* (food and nutrition education), having university students use educational coloring books. Monica Wellington's coloring books for children, published in the U.S.A., were used to create the *Shokuiku* picture books. The purpose of this study is to identify the effect of university students creating a *Shokuiku* picture book. The results of a self-assessment questionnaire that was administered to the student producers of the picture books are as follows: (1) The university students made a brand new picture book by thinking up an original story using an American drawing from a coloring book picture. (2) In the process of the picture book production, the students collaborated with their friends devising the words and sentences. (3) The university students became interested in *Shokuiku* through picture book creation. (4) The students felt satisfied reading the completed picture books to the nursery school children.

キーワード: 食育、アメリカのcoloring book、 ぬりえ絵本の製作、自己評価

1．研究の背景と目的

近年、食を大切にする心の欠如、栄養バランスの偏った食事や不規則な食事の増加、肥満や生活習慣病の増加、過度の痩身志向、食品の安全性の問題の発生、食料の海外への依存、伝統ある食文化の喪失など、日本の食をめぐる問題は深刻な様相を呈している[1)、2)]。そのような食の状況の悪化を背景として、食のあり方を全面的に見直し問題解決を図るという観点から、2005（平成17）年に食育基本法が施行された。食育基本法では、「国民が生涯にわたって健全な心身を培い、豊かな人間性を育むことができるようにする」ことを目的としており、「様々な経験を通じて『食』に関する知識と『食』を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる食育を推進することが求められている」とされている。これを受けて、食育の推進に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、翌年の2006（平成18）年には食育推進基本計画が決定された。

食育推進基本計画では、食育の推進に関する施策の基本的な方針として、以下の７項目が掲げられている；①健全な食生活に必要な知識等が年齢、健康状態等により異なることに配慮しつつ、心身の健康の増進と豊かな人間形成を目指した施策を講じること、②様々な体験活動等を通じ、自然に国民の食に対する感謝の念や理解が深まっていくよう配慮した施策を講じること、③社会の様々な分野における男女共同参画の視点も踏まえた食育を推進する観点から、国民や民間団体等の自発的意思を尊重し、多様な主体の参加と連携に立脚した国民運動となるよう施策を講じること、④子どもの父母やその他の保護者や教育・保育関係者の意識向上を図り、子どもが楽しく食を学ぶ取組が積極的に推進されるよう施策を講じること、⑤家庭、学校、地域等様々な分野において、多様な主体から食を学ぶ機会が提供され、国民が意欲的に食育の活動を実践できるよう施策を講じること、⑥伝統ある食文化の継承や環境と調和した食料生産等が図られるよう配慮するとともに、食料需給への国民の理解の促進や都市と農山漁村の共生・対流等により農山漁村の活性化と食料自給率の向上に資するよう施策を講じること、⑦食品の安全性等食に関する幅広い情報を多様な手段で

提供するとともに、行政、関係団体、消費者等の間の意見交換が積極的に行われるよう施策を講じること[3]。

学校教育においては、以上の施策に加えて、2007（平成19）年３月に文部科学省から『食に関する指導の手引』[4]が発行された。『食に関する指導の手引』[4]では、学校における食育についての理解を深め、校内の教職員が連携して、学校教育活動全体で食に関する指導を充実させることの必要性が明示されている。さらに2008（平成20）年３月に小・中学校新学習指導要領が告示され、翌2009（平成21）年３月には高等学校・特別支援学校の新学習指導要領が告示されて、総則に「学校における食育の推進」が盛り込まれたことにより、今後は一層積極的に、教師が児童・生徒の食生活の改善・向上に関わることが要求されている。

以上のような背景があり、既に家庭科や総合的な学習の時間を中心とした学校教育において、多方面にわたる食育実践の積み重ねが着々となされている。にもかかわらず、その教育的効果については十分に明らかにされているとは言い難い状況にある。その原因の一つとして、信頼ある理論に基づいた食育の実践例がほとんどなく、教育的効果を実証する観点が曖昧であることが挙げられる。とりわけ、食行動の変容は食育の重要な側面であると同時に教育的評価の指標にもなる。しかし、食行動変容に関する理論的枠組みが不在のまま、様々な取組が行われているというのが現状である。

食に関する正しい知識の習得や望ましい意識・態度への変容から健康的な食行動の実践・定着・習慣化に至るまでを包括した行動変容理論の一つに、トランスセオレティカル・モデル（transtheoretical model；以下、TTMとする。）がある。筆者は、先行研究において、TTMを基盤とした対象者の食行動変容を促すための介入を考案・実践して、その評価を行ってきた[5]。

本研究では、これまでの行動科学的アプローチに加え新たな取り組みとして、食に関する言語・造形表現活動を通して豊かな感性を育むことを意図した食教育を行い、その効果と隘路について検討することを目的とした。具体的には、将来教師として食育を指導する立場となりうる教育学部学生に（1）「食育ぬりえ絵本」を製作させて自己評価を行わせる、（2）製作した「食育ぬりえ絵本」を幼児に読み聞かせした後、学生同士でも互いに作品を読み聞かせして絵本の出来映えを相互評価させる、そして（3）保育士による「食育ぬりえ絵本」の読み聞かせ・評価を行う、という３つを柱として、「食育ぬりえ絵本」の食育における可能性について明らかにしたいと考えた。なお、「食育ぬりえ絵本」の製作においては、アメリカで子ども向けの食育教材として注目されているMonica Wellington著のcoloring bookを利用した。

本稿では、最初の柱である上述の（1）の実践及び結果について報告する。

アメリカでは、摂取カロリー過多、野菜・果物の摂取不足、運動不足などによる肥満のまん延が社会問題となっており[6]、食育への関心が高まっている。食育教材も、多種多様な魅力的なものが開発され市販されている。無料で入手できる教材としては、インターネット上にアップされた、食材や楽しいキャラクターを使った栄養教育用のぬりえが興味を引く（例えば、"Educational Coloring Book" http://wellnessways.aces.illinois.edu/color ingbook/index.html [2011.10.31閲覧]）。また、どの食品をどれだけ食べたらよいかを図示したアメリカの「フード・ガイド・ピラミッド（Food Guide Pyramid）」）を理解させるためのぬりえも多く、図１の（8）の「フード・ガイド・ピラミッドのぬりえ」は、その一例である。

食に関するぬりえ絵本（coloring book）としては、絵本作家であるMonica Wellington（以下、Wellingtonとする。）が著した４歳から８歳児用の「COLOR & COOK」シリーズがある。図１の（1）～（5）に、それらの表紙を示した。「COLOR & COOK」シリーズには、（1）カップケーキ（CUPCAKES）、（2）ピザ（PIZZA）、（3）朝食（BREAKFAST）、（4）クリスマスクッキー（CHRISTMAS COOKIES）、（5）スナック（HEALTHY SNACKS）があり、これらは、Dover社から定価4.99ドルで販売されている。（6）と（7）は、「カップケーキ」と「ピザ」の一画面である。Wellingtonのぬりえ絵本には、MollyとJackというかわいい子どもの主人公が登場し、子どもたちが、日常生活の中で、食材を購入したり収穫したりして、カップケーキなどの簡単な調理に挑戦するというストーリーになっている。

日本において、「食育ぬりえ絵本」として販売されているものの一つに、株式会社保健福祉ネットワークが企画・販売している『朝ごはんぬりえ絵本』や『いろいろなやさい』がある。後者は、にんじん、ピーマン、きゅうり、さといもなどの日常よく利用される野菜を春・夏・秋・冬の季節に分けて、旬の野菜のキャラクターが活躍するように作られたぬりえである。ストーリー性はあまりないが、野菜に親しみ、名前と旬を覚えるには楽しい教材である。大阪府守口保健所では、平成22年度にこのぬりえを使用して、父と子の食育を実施したことが報告されている[7]。また、水戸市保健センター・食生活改善推進員会・茨城県栄養士会は、2000（平成12）年度より「手づくりぬりえ絵本」による「正しい食生活習慣定着活動」を展開し、家庭における食育推進を図っている[8]。

以上のことから、Wellingtonのcoloring bookを利用

(1) カップケーキ

(2) ピザ

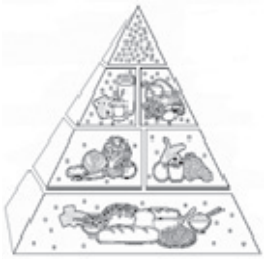
(3) 朝食

(4) クリスマスクッキー

(5) スナック

(6) カップケーキのぬりえ

(7) ピザのぬりえ



(8) フード・ガイド・ピラミッドのぬりえ

図1　Wellingtonのcoloring book（COLOR & COOKシリーズ）の表紙とぬりえ例

しながらストーリー性のある食育ぬりえ絵本を教育学部学生に製作させることには、大きく分けて次の２点の意義があると期待される。一つは、食育ぬりえ絵本の製作を通して食育に対する関心や理解が高まるといった製作者自身に対する教育的効果である。そして、もう一つは、製作した食育ぬりえ絵本の読み聞かせなどを通して、聞き手（例えば、幼児や児童、生徒）に対する食育の普及・啓発といった教育的効果である。本稿では、特に前者に焦点を当てて、食育ぬりえ絵本の製作が製作者自身に与える影響を質問紙・感想文による自己評価から明らかにすることにした。

２．方法

2-1. 食育ぬりえ絵本の製作・読み聞かせ

中国地方にあるＨ大学教育学部の２年次生26人に食育ぬりえ絵本を製作させた。具体的な方法としては、まず、対象学生26人を２～４人からなる８つのグループに分け、Wellingtonの５種類の食育ぬりえ絵本（カップケーキ、朝食、クリスマスクッキー、ピザ、スナック）のうち、どれを用いて食育ぬりえ絵本の製作に取り組むかを決めさせた。その後、該当の絵本のコピーを学生に与え、配布した白絵本台紙のページ数に合わせて場面を選択させ、ストーリーを考えさせた。

製作するぬりえ絵本は、①Wellingtonのものとは異なる独自性のあるものにすること、②野菜の産地などの調べ活動を入れて探究的な内容にすること、③オノマトペを入れるなどして幼児に好まれるものにすること、そして④絵本のテーマとなっている調理品を実際に作り、レシピや写真を絵本の最後のページに貼り付けること、という４つの条件を満たすように伝えた。この取り組みの教育的意義は、次の３つにある。第１は、グループでぬりえ絵本を製作し、幼児への読み聞かせをする際の効用であり、「楽しい」、「癒される」、「創造への意欲がわく」、「仲間と協調して行う活動を楽しむ」、「豊かな言語表現について考える」、「ことばと絵を媒介として、子どもに食育をすることの喜び」ということである。第２は、探究学習の過程をたどらせることにより、「問題の発見」、「仮説の立案」、「情報の収集と選択」、「仮説の検証」が可能となり、批判的思考力が育成される。第３は調理の効用であり、食生活の実践力の育成に寄与し、生きる力の基盤が築かれるということである。将来、教員となって学校現場で様々な食育を展開することを期待されている学生にとって、この３つの意義を含むぬりえ絵本製作は貴重な体験になることと思われる。

食育ぬりえ絵本製作は、2011年５月末から６月末の約１ヶ月間にグループ独自の課外活動として行い、どの

グループも10時間程度をかけて完成させた。ぬりえを塗る際に使用したのは、色鉛筆であったが、仕掛けでは厚紙やフェルトなどの様々な素材が使用された。７月12日には完成した８冊の絵本をＨ大学構内にあるＨ保育園に持参し、30分程度ではあったが幼児を対象として読み聞かせを行った。同日および７月26日には、製作した大学生同士で絵本の読み聞かせを行い、アンケートによる相互評価を実施した。また８月２日には、質問紙による自己評価を行うとともに、絵本製作に関するレポートを提出させた。本稿では、８月２日に実施した絵本製作の自己評価を対象として、食育ぬりえ絵本製作の効果と隘路について分析する。

2-2. アンケートによる自己評価の概要

(1) 調査対象者：食育ぬりえ絵本を製作したＨ大学教育学部２年次生26名人中の25名（回収率96％）

(2) 調査期間：食育ぬりえ絵本製作は2011年５月末～６月末、自己評価は同年８月２日

(3) 調査方法：当日、15の質問項目からなる自己評価の質問紙に直接記入させる方法をとった。

(4) 調査内容：質問項目は以下の15項目であった。

①「食育ぬりえ絵本の製作を通して絵本全般が好きになったか」（絵本への好意）

②「食育ぬりえ絵本製作では、友だちと協力して作業を進めたか」（協調学習ができたか）

③「グループになって食育ぬりえ絵本の製作を行うことは楽しかったか」（絵本製作の楽しみ）

④「食育ぬりえを塗ることで心が癒されたか」（ぬりえによる心の癒し）

⑤「食育ぬりえ絵本の製作を通してぬりえが好きになったか」（ぬりえへの好意）

⑥「幼児にとってどのような絵本がよいのか考えながら製作したか」（幼児への配慮）

⑦「食育ぬりえ絵本が楽しくなるように、ことばや文章を工夫したか」（言語表現の工夫）

⑧「食育ぬりえ絵本がきれいな色合いになるように工夫をしたか」（色彩上の工夫）

⑨「食育ぬりえ絵本に仕掛けを入れるように工夫をしたか」（仕掛け絵本の工夫）

⑩「食育ぬりえ絵本製作で重視したことを順番に3つあげる」（絵本製作上の重点）

⑪「ぬりえ絵本製作を通して、幼児に対して心が開かれる気持になったか」（幼児への心情）

⑫「ぬりえ絵本作りを通して、食育に興味がわいたか」（絵本製作による食育への興味）

⑬「できあがった絵本を保育園の子どもに読み聞かせをして楽しかったか」（読み聞かせの楽しみ）

⑭「絵本作りで難しかったことや製作のよりよい方法についての気づき」（自由記述）

⑮「製作した絵本の出来映えを５段階で自己評価する」（５件法による自己評価）

(5) 分析方法：調査内容①～⑬と⑮については単純集計を行った。⑩については、複数回答として、単純集計を行った。⑭については、自由記述内容を分析した。

３．自己評価の結果

対象学生には、質問項目①～⑨までと⑪～⑬までは、各項目に対してそれぞれ５件法（強い否定には１、やや否定的な場合には２、どちらともいえないと答えた場合は３、やや肯定的な場合は４、強い肯定には５）で評定するように求めた。その結果は図２のとおりである。

3-1. 絵本への好意

図２の①が示しているとおり、「食育ぬりえ絵本の製作を通して絵本全般が好きになったか」という絵本への好意については、「とても好きになった」(56％)、「やや好きになった」(36％)と答えており、絵本製作を通して、絵本全般への好意が著しく高まったことが明らかになった。

3-2. 協調学習ができたか

図２の②は、「食育ぬりえ絵本製作では、友だちと協力して作業を進めたか」という質問によって、協調学習ができたかどうかを尋ねた結果である。全員が「とても協力した」(60％)もしくは「やや協力した」(40％)と答えており、絵本製作は協調学習を可能にすることが示された。

3-3. 絵本製作の楽しみ

図２の③は、「グループになって食育ぬりえ絵本の製作を行うことは楽しかったか」という、絵本の共同製作の楽しさに関する回答結果である。全員が「とても楽しかった」(60％)もしくは「やや楽しかった」(40％)と答えており、絵本製作は楽しい活動であることが示された。

3-4. ぬりえによる心の癒し

図２の④は、「食育ぬりえを塗ることで心が癒されたか」という、ぬりえによる心の癒しについて尋ねた結果である。「とても癒された」(28％)、「やや癒された」(40％)と答えたのは全体の７割弱であり、「どちらともいえない」と答えた者が28％いた。今回は、ぬりえを一人でゆっくりと味わいながら塗り、心が癒されるというのではなく、期日までに共同製作として仕上げなければならないという責務が、癒しの効果を引き下げたと思われる。

3-5. ぬりえへの好意

図２の⑤は、「食育ぬりえ絵本の製作を通してぬりえ

が好きになったか」というぬりえへの好意の増幅について尋ねた結果である。「とても好きになった」(56%)もしくは「やや好きになった」(16%)と答えたのは全体の約4分の3であったが、「どちらともいえない」と答えた者が16%、「あまり好きにならなかった」と答えた者が12%いたことは、今回の食育ぬりえ絵本製作が、ぬりえ全般を好きになる万能薬ではなかったことを示している。

3-6. 幼児に配慮した製作

図2の⑥は、「幼児にとってどのような絵本がよいのか考えながら製作したか」という質問の結果である。全員が「とても考えた」(76%)もしくは「やや考えた」(24%)と答えており、幼児に配慮して、彼らに適した絵本を製作したい、という思いが強かったことが窺われる。

3-7. 言語表現の工夫

図2の⑦は、「食育ぬりえ絵本が楽しくなるように、ことばや文章を工夫したか」という、絵本中の言語表現の工夫について尋ねた結果である。全員が「とても工夫した」(68%)もしくは「やや工夫した」(32%)と答えており、オノマトペの導入や幼児に分かりやすいことば遣いを念頭に置いて製作されたことが窺われる。

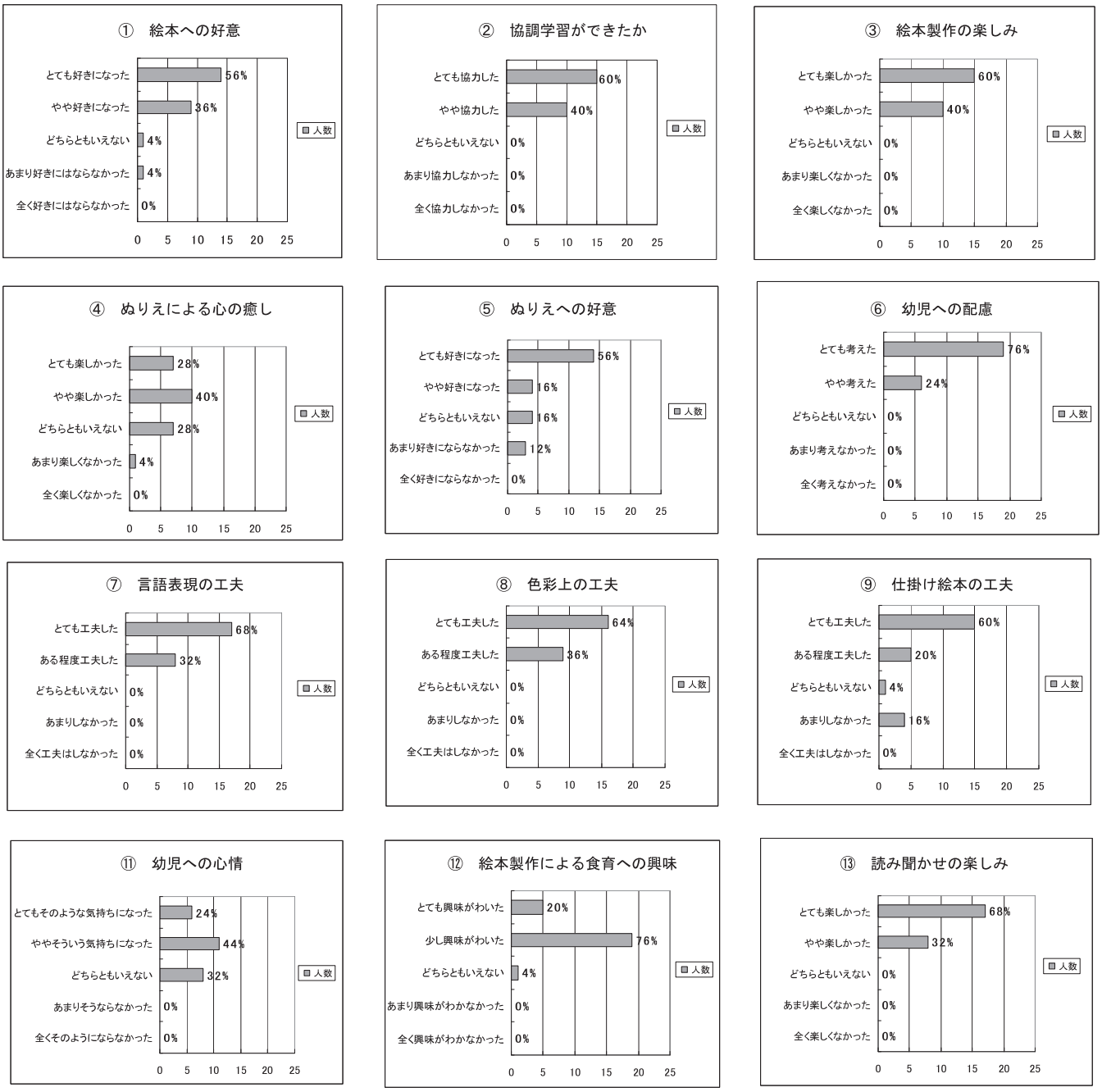


図2 食育ぬりえ絵本の製作後における自己評価

3-8. 色彩上の工夫

図２の⑧は、「食育ぬりえ絵本がきれいな色合いになるように工夫をしたか」という、色彩上の工夫について尋ねた結果である。全員が「とても工夫した」(64%)もしくは「やや工夫した」(36%)と答えており、色鉛筆を使用することによる色の薄さをカバーするために、配色に留意したことが示されている。

3-9. 仕掛け絵本の工夫

図２の⑨は、「食育ぬりえ絵本に仕掛けを入れるように工夫をしたか」という、幼児が喜ぶ絵本の仕掛けについて尋ねた結果である。「とても工夫した」(60%)もしくは「やや工夫した」(20%)と答えたのは全体の８割に達したが、「あまり工夫しなかった」と答えた者も16%いた。食育絵本では様々な仕掛けが可能であるので、できるだけ取り入れるように示唆することが必要であったと思われる。

3-10. 幼児への心情

図２の⑪は、「ぬりえ絵本製作を通して、幼児に対して心が開かれる気持になったか」という、幼児への心の開示を尋ねた結果である。「とてもそのような気持になった」と答えた者は24%で、「ややそういう気持になった」(44%)を加えても７割弱である。ぬりえ絵本製作途上においては、まだＨ保育園の幼児と交流を持っていないため、幼児を思い、心を開くということは無理であったと思われる。食育ぬりえ絵本製作の前に保育園を訪れて、幼児の食事場面や絵本を読んでもらっている場面を観察させてもらうことによって、絵本製作中の心情が幼児に向いてより開かれることになるのかも知れない。

3-11. 絵本製作による食育への興味

図２の⑫は、「ぬりえ絵本作りを通して、食育に興味がわいたか」という、絵本製作活動が食育への興味に影響するかどうかを尋ねた結果である。「とても興味がわいた」(20%)と「少し興味がわいた」(76%)を加えると全体の９割強になり、今回の食育ぬりえ絵本製作が食育への興味を高める効果的な方法であることが明らかになった。できるならば、全体の４分の３を占めている「少し興味がわいた」と答えている者を、「とても興味がわいた」にシフトさせたいものである。

表１　食育ぬりえ絵本製作の困難点・改善すべき点

(a) どこまでを幼児に求めていいのか(知識、理解)を知ってから絵本を作成すると、質が高まると思う。
(b) ストーリー作成が難しかった。
(c) 幼児がわかるレベルでの食育について考えることが難しかった。
(d) 幼児がよろこぶようなデザインや仕掛けをつくることが難しかった。
(e) なかなかグループで集まれなかった(時間が足りなかった)。
(f) 仕掛けを取り入れることが難しかった。
(g) 調べ学習をどこまで取り入れるか悩んだ。
(h) 幼児にどこまで食について教えてよいか困った。ストーリーの重視とオノマトペの両立が難しかった。
(i) 100円のマジックテープは粘着力が良すぎてはがしにくかった。
(j) 絵本づくりの原　画が、英語で物が書いてあったので、日本語のもので同じようなものがあればその方がよりよいかなと思った。
(k) 話の方向性を決まるのに時間がかかった。
(l) グループのみんなで集まる時間がなかなか取れなかった。ぬりえは手分けしてぬった。ページ数が決まっていたので話しを作るのが難しかった。
(m) 幼児によって破損する可能性がある箇所を見込んで製作すべきだった。
(n) まず、テーマ選びの点で子どもが興味を持ってくれる内容で、かつ食育の内容がしっかり入っているものを探すのが本当に難しかった。食育の内容を説明するページを、遊びの要素を加えてみたりして、子どもが飽きずに見てくれる工夫をすると良いと思う。
(o) 子どもたちが理解できる内容のものかどうかの判断が難しかった。絵本の中の遊べるページに特に力を入れたのがとてもよかったと思う。
(p)絵やページ数が限られていることで、思った通りのストーリーを作りづらかった。
(q) 元の絵本の内容と調べ学習を結びつけるのが難しかった。
(r) 子どもたちはどのようなものに興味を持つのか考えることが難しかった。
(s) 幼児には少し難しい内容だったかな、と反省した。
(t) 幼児がどのくらいまで理解できるのか考えるところが難しかった。
(u) 伝えたいことを、子どもたちに分かりやすいようにするためにどのような工夫をしたら良いかが難しかった。
(v) 子どもたちがどこまで理解してくれるかがわからなかったので、食育などの調べ活動のレベルを決めるのが難しかった。
(w) 食育にテーマがしぼられていたため、調べ学習のテーマを選ぶのが難しかった。

3-12. 読み聞かせの楽しみ

7月12日にH保育園において、製作した8冊の食育ぬりえ絵本を持参した学生たちが、幼児に絵本の読み聞かせを行った。図2の⑬は「できあがった絵本を保育園の子どもに読み聞かせをして楽しかったか」という質問に対する回答結果である。全員が「とても楽しかった」(68%)もしくは「やや楽しかった」(32%)と答えており、自ら製作した絵本を実際の幼児に読み聞かせをすることは楽しい、と学生は感じている。今後は、「やや楽しかった」と答えている者をもう1段階アップさせて、「とても楽しかった」と感じさせる手立てが必要と思われる。

3-13. 5件法による出来上がった作品の自己評価

質問⑮で「製作した絵本の出来映えを5段階で自己評価する」ように求めたところ、5点は2名(8%)、4点が17名(68%)、3点が5名(20%)、2点が1名(4%)であった。この数字から、出来上がった食育ぬりえ絵本は、ある程度よいものとなった、と考えている学生が大半を占めている。とてもよいものになったと答えている者の割合が少ないこと、その一方で普通の出来具合だと思っていたり、やや不十分と考えた者が4分の1いたことから、全ての者が力を出し切り、十分満足できるよい作品をつくり上げるための製作指導のあり方を検討せねばならない。

3-14. 絵本製作上の重点

質問⑩で、絵本製作上重点を置いた事項について、「(a)幼児が喜ぶ仕掛けや工夫をすること」、「(b)幼児への食育のよい教材になること」、「(c)幼児が喜ぶようなきれいな色合いにすること」、「(d)幼児にとっておもしろいお話にすること」、「(e)食を巡る調べ活動を取り入れること」、「(f)絵本自体をきれいに仕上げること」など8項目をあげ、そのうち重要と思われるものから順に3つ選ばせ、複数回答をさせたところ、次の結果になった。「(a)」は72%、「(b)」は68%、「(c)」は48%、「(d)」は44%、「(e)」は32%、「(f)」は28%であった。絵本が幼児にとって喜ばれるものになるように思いを巡らしながら製作したこと、そして幼児に向けて、調べ活動を含んだよい食育教材をつくることが意識されていたことが窺われる。

3-15. 絵本作りで難しかったことや製作のよりよい方法についての気づき（自由記述）

表1は、「食育ぬりえ絵本製作で難しかったことや製作のよりよい方法についての気づき」について自由記述させたものである。

学生が絵本製作上で困難に思ったことは、第1に、課外の時間を使ってグループで絵本を製作するため、各自の都合により集合が容易にはできなかったこと（e、l)、第2に、限られた枚数に納まるようにストーリーを作ること（b、k、l、p)、第3に幼児が興味を持つのかどうかが分からなかったこと（n、r)、第4に幼児が絵本の内容について理解できるかどうかが分からなかったこと(a、c、h、o、s、t、v)、第5に調べ学習を絵本の中に盛り込むこと（g、p、v、w)、第6に幼児が喜ぶ仕掛けや内容を理解させるための工夫をすること（d、f、o、u）が上げられている。

製作のよりよい方法への示唆としては、「食育の内容を説明するページを、あそびの要素を加えるなどして、子どもが飽きずに見る工夫をすること（n)」、「破損されることを見込んで丈夫な絵本を製作すること（m)」等が上げられた。

4．考察

2011年5月末から6月末にH大学教育学部の学生26人を対象として、アメリカのcoloring bookを利用しながら食育ぬりえ製作をさせた。7月12日には、完成した絵本を持参させてH保育園で幼児に向けて読み聞かせを行った。この一連の活動について、アンケートによる自己評価をさせたところ、「絵本への好意（質問①)」、「協調学習ができたか（質問②)」、「製作の楽しみ（質問③)」、「ぬりえへの好意（質問⑤)」、「幼児に配慮した製作（質問⑥)」、「言語表現の工夫（質問⑦)」、「色彩上の工夫(質問⑧)」、「仕掛け絵本の工夫（質問⑨)」、「食育への興味（質問⑫)」、「読み聞かせの楽しみ（質問⑬)」という側面については相当高い自己評価がなされた。一方、「ぬりえによる心の癒し（質問④)」、「幼児への心情（質問⑪)」に関しては比較的評価が低くかった。さらに、「ぬりえ絵本作りを通して、食育に興味がわいたか（質問⑫)」という問に対しては、やや興味を感じたという学生が4分の3を占めたが、その上位にあたる「とても興味がわいた」と答えた学生は5分の1に過ぎなかった。今回の食育ぬりえ絵本製作過程を改善して、より効果のある活動内容を構想する必要がある。また、絵本の出来映えを点数で自己評価をさせた結果、3点をつけた者が5名（20%)、2点をつけた者が1名（4%)おり、合計すると全体の4分の1になる。このように低い評価をした学生については、絵本製作指導をきめ細かく行って、ストーリーを方向づけ、魅力的な画面構成になるようにヒントを与えるなどの援助が必要であると思われる。その際に、表1で示した、学生が指摘した製作上の困難点とよりよい方法への示唆は、大いに役立つと考えている。

以上のように、アメリカのcoloring bookを利用して、食育ぬりえ絵本を製作し、幼児に読み聞かせたことにより、将来教師となる学生にとって有益な学習がなされたことは自己評価が示すとおりである。しかし、実際に製

作された絵本が同じ大学生の間ではどのように評価されたのか、という相互評価については本稿では触れていない。そこで、次報では、食育ぬりえ絵本製作活動の得失について、相互評価を通して見てみたい。

引用・参考文献

1）内閣府編『平成18年度版 食育白書』、社団法人時事画報社、2006、pp.2-27.

2）勝野美江「農林水産省の食育の取組」、『日本食生活学会誌』、18(2)、2007、pp.97-102.

3）内閣府編、前掲書1)、2006、pp.30-31.

4）文部科学省『食に関する指導の手引』、東山書房、2008.

5）柴英里『行動変容ステージモデルに基づく青年期の食行動に関する研究』、すずさわ書店、pp.1-106、2010、106pp.

6）Flegal, M. Katherine, Carroll, D. Margaret, Ogden, L. Cynthia, & Curtin, R. Lester, "Prevalence and Trends in Obesity Among US Adults, 1999-2008", The Journal of the American Medical Association, 303(3), 2010, pp.235-241.

7）「おおさか食育通信－つづけよう食育」http://www.osaka-shokuiku.jp/tsuzukeyou/quick_view.php?id=121（2011.10.31閲覧）

8）『事業情報詳細－健康づくりに向けた「食育」取組データベース』http://www.nutritio.net/shokuiku/toroku_pub/FMPro?-db=shoku_enq2.fp5&-format=browse.html&-lay=lay1&-RecID=33329&-find（2011.10.31閲覧）

Creation and Self-assessment of a Picture Book for *Shokuiku* Applying American Coloring Books

Eri SHIBA

BULLETIN OF THE
FACULTY OF EDUCATION, KOCHI UNIVERSITY No.72 2012
KOCHI, JAPAN